

小指の花びら



昨日の夜に撮ってみたシャンパンの写真を補正していると、後ろから美晴さんが覗き込んできた。

微かに汗のにおいがする。

彼女はついさっき大学生の卒業式の前撮りを済ませたばかりだった。

最近の写真屋はなんでもかんでも前撮りするらしく、岩崎写真館も「七五三くらいは」「成人式くらいは」と

言っているうちに卒業式の前撮りもするようになってしまったのである。

「また難しい写真を補正してる」

「お疲れ様。人に比べれば楽なもんだよ」

私はそう言って彼女にカメラのメディアを渡し、同じようなものをまた受け取った。切手みたいなプラスチックの欠片だけど、この中に何百枚もの高画質な写真が入るっていうのはちょっと信じられない。

でも今はそういう時代なのだ。岩崎さんなんかは、きっともっと信じられないのだろう。

「やっぱり美晴さんはいい写真撮るね。ほら、これなんて最高」

パソコンの画面の中には口を大きく開けて笑っている女の子が写っていた。これじゃあ写真には出来ないが、いい思い出になるだろう。

「だめよこんなの。もっとこの子の可愛さを引き出さなきゃ」

「うーん、だからって別人に見えちゃ意味ないでしょ？」

「そんなことしないわ」

美晴さんはすぐにお客さんのところへ戻って行った。先に私が補正していた写真を選ばせるのだろう。岩崎さんが休みの日は私と美晴さんで写真館を切り盛りするのだが、今日のように撮影が入る日に彼が休んだのは初めてだった。

「お前らも実戦の怖さってやつを経験していかなきゃな」

そんな事を言って奥さんとデートに行ってしまったのだ。
私たちは岩崎さんと一緒に何度も同じような仕事をしていたため、実務の面で混乱することはなかったが、
何かあったらどうしようか、という不安はずっと付きまとっていた。

美晴さんから受け取ったメディアをパソコンに入れて次々と補正していく。
コツを覚えてしまうと流れ作業のように出来て楽だったが、
お客さんのことを考えてしまうとつい気合が入ってしまい、結局時間がかかってしまうことになるのが常だった。

出来上がった写真をお客さん渡してしまうと、あとはネットで受注した写真の現像くらいしかやることがない。
こちらはプリント用紙のセット以外はほぼ全ての工程が自動なので、正直言ってやりがいがあった。
勝手に出来上がってくる写真を眺めていると、
撮影後の片付けを終わらせた美晴さんが紅茶を入れて持ってきてくれた。

「三紀男くん、ここ結構長いよね」

「そう言えばもう二年くらいになるなあ」

美晴さんは私が来る一年前からここで働いている。
その前は保育士だったらしい。子供を撮り慣れている理由はそこにあるようだ。
彼女はこの二年の間に写真のコンクールで何度か小さな賞を撮っていた。
特に人の表情を巧く撮るので、この職場は彼女に合っているんじゃないかと思っている。

「あなたはカメラマンとか、興味ないの？」

そう言われて私は少し混乱した。写真は好きだ。撮るのは嫌いではない。
そんな程度の私に写真家という仕事は少し重い。独立するよりは、ここに居た方が性に合っているような気がした。

「美晴さんはそろそろって感じがするね」

「それで悩んでいるわけですよ」

彼女は困ったように笑った。葉子とは違って素朴な女らしさがある人だ。
彼女は独立しようとしていた。しかし今それをしてしまうと、岩崎写真館に迷惑がかかると思っ

ているらしかった。

私は美晴さんを後押しするつもりで、無責任な提案をする。

「岩崎さんは今が一番いい時なんだから、働かせとけばいいんじゃない？」

「昔ならそれでも良かったんだろうけど、今の時代、一人でここをやるのは無理よ」

一人で。その言葉が私の耳に引っかかる。美晴さんは、遠まわしに私の意思を聞こうとしているのだと気付いた。

「僕には無理だよ。美晴さんみたいに巧く撮れない」

それに、と思う。ここで働くということは、レムで働けなくなることと同じだった。今はアルバイトとして朝十一時から夕方五時という時間に働かせてもらっているが、美晴さんの穴を埋めるとすればそれができなくなってしまう。レムの時間をずらすことは出来ないし、ただでさえきつい生活なのに、これ以上睡眠時間を削れるはずがなかった。

「でも、写真触るとき楽しそうよね」

美晴さんの言葉にはっとしてしまう。そう、確かに私は写真が好きだ。生活費のためにここで働いていたはずなのに、いつの間にか写真が趣味になり、今はそれ以上のやりがいを感じてしまっている。私は自分が信じられなかった。私は男の自分を捨てるために東京へ来たのだ。それなのに、またここで三紀男の人生を作ってしまうなんて。

ふと岩崎さんの顔を思い出してがつんときた。あの人から私に写真を教えてくれるときの表情。嬉しそうだった。カメラのことなんて何も知らなかった私に、すごく丁寧に教えてくれたのだ。

「写真ってのは構図ばかりが大事だと思われがちだが、一番気を使うべきはライティングだ。自然界の全ては光が反射して彩られている。それが理解できなきゃ、何を撮っても味気ない」

今思えば、素人にそこまで教えることには意味があったのだ。仕事を円滑に進めるだけなら、理論なんて必要ない。やり方と、トラブルの対処方法だけを教えればいいのだ。人は物事の根っこの分を教えるとき、それ以上のことを知って欲しいと思っているんじゃないだろうか。

少なくとも私はそう感じてしまった。だから写真が好きになってしまったんだ。

どうしよう、と途方に暮れてしまう。

今まで放置していた選択肢がようやく目の前に現れてきたようだった。

完全女装を貫いてレムのような店で働くか、写真を仕事にして時々女装をするか、である。

私の女装を岩崎写真館に認めてもらう、ということは考えられない。私は女ではないのだ。

声も、体も、何もかも。そもそもお客さんと接する機会のある職場でそんなことが許されるはずがない。

たとえ許してもらえたって私の方から断るだろう。

「でも、ほんと無理ですよ。他の人を雇った方がいい」

私は紅茶のお礼を言ってから、逃げるようにしてお店を出た。

陽は落ちきっていなかったが、凍えるほど冷たい風が吹いていた。

生きてると、望まなくても歴史ができてしまうものなんだ。そんな当たり前のことを考えてしまう。

今年一番の寒さを感じながら、首に巻いていたマフラーをきつく巻き直した。

その日はレムが休みの日だった。

私はスーパーで特売のものを探しながら向こう一週間の献立を考えている。

私も綾姉も特に好き嫌いはないけれど、お店でご飯を食べたがる人のためにお客さんの好みも考慮しなければならない。

とは言っても、ベタなメニューを出せば必ず食べてくれるし、文句も言わないから楽なものだった。

いつからこんな生活に慣れてしまっていたのだろう。

そんな事を考えてしまうのは、きっと美晴さんのせいだ。

二年前に東京へ来たとき、初めてアルバイトをした場所が岩崎写真館だった。

その時はまだ日に三、四時間の、本当にお手伝いみたいな感じで働いていた。

だからこそ夜は新宿の女装バーで思いっきりはしゃぐことが出来ていたのだ。

あの頃はあの頃でまあ楽しかった。

けれど今ならよくわかる。

あの頃は、先のことなんかちっとも考えていなかったんだ。

そのつけがようやくまわって来たらしい。

どちらを取るかと聞かれればレムを取ると答えるだろう。でも、岩崎写真館だって取りたい。

男でありながら女であることを望んだ私は、たぶん、他の人よりわがままだ。

例えばそれは化粧をしている時。すっと通った鼻筋を嫌う人はあまりいない。けれど私は男らしさを感じさせるその鼻を憎らしく思っている。自分がどれだけ恵まれているのかということのを忘れて、欲しいものが手に入らない辛さに喘いでいしまう。私の人生はそんなわがままの繰り返しで成り立っているのかもしれない。

そうしなければ生きていけなかった、と言えど誰かに信じてもらえるだろうか？
今こうしてのうのうと生きている私に対して、誰が信じてくれるだろうか。
私は手首を切ろうとした事がない。自分を傷つけることは怖くてできないからだ。女になれないからといって崖から飛び降りることもしない。簡単な話、死にたくないからだ。生きるということは生きていると感ずることだと思ふ。
生きている感ずを得るために、わたしはわがままであることを選んできた。でも、もうそれは選べない。

買い物を終えてマンションの扉を開けると、そこはレムだ。ただいま、と言うと、おかえり、と返ってくる。
今日は休みのはずなのに綾姉がいるらしい。そういえばそろそろ確定申告の時期だったけ。そんな事を考えながらキッチンの冷蔵庫を開ける。綾姉はリビングのテーブルに書類を広げていた。

「なんか、暗くない？」

そう言われて私はキッチンの電気を付け忘れていたことに気付く。
リビングの照明で十分明るかったので気にならなかったのだ。
ぱちん、とスイッチを入れると綾姉が「いや、そうじゃなくてさ」と言って立ち上がった。こっちに来る。そう思うと私は逃げ出したくなった。
今綾姉に何か言われたら、私は必ず話してしまうだろう。そして綾姉はきっとその答えを知っている。

「ごめん」

そんなのはいやだ、と思った。
そう思うと私はなぜか綾姉に謝って、自分の部屋に向かって歩き出した。
しかしすぐに腕をつかまれて私は動けなくなってしまう。
いつの間に彼女はこんなに近くに來ていたのか。つかまれた腕は力強くて、少し怖い。

「ショックだわ。ミキに嫌われた」

綾姉の声を聞くと、床が見えた。それでようやく自分が何も見ていなかったことに気付いた。そろり、と視線を上げると固く閉じた綾姉の唇が見える。もう少し顔を上げると、情けない顔をした綾姉がいた。

私は思わず彼女に声をかけてしまう。

「私、まだ男だよ」

「ばか、私もよ」

綾姉は私の肩に両手を乗せた。それだけで私は床に崩れてしまった。キッチンの床が冷たい。よいしょ、とそこに綾姉も座り込んで、私たちの視線は同じ高さになった。

「なにかあったの？」

綾姉らしくないなあと思う。その言葉はいつもひとみちゃんが言っていた。誰にだろう？ トーコにだ。私は彼女の気持ちが一瞬わかった。あの子が待っていたのは言葉じゃない。気持ちだ。私たちは誰かのやさしい気持ちに触れて、ようやく安心できるんだ。

「綾姉のことを嫌ってるわけじゃないよ。ちょっと考え事をしてたんだよ」

「私の顔を見て逃げ出すようなこと、考えてたんだ？」

そして私は何も言えなくなる。だめだ。これでは「聞いてくれ」と言っているようなものだ。私は必死に言葉を捜した。けれど見つからなかった。当たり前だ。言いたいことなんて何もないんだから。

「あんたは本当になんにも言わない」

「だって、綾姉だってなんにも言わないじゃない」

それを聞くと彼女は笑った。私はもう絶対話すものか、と口を閉ざして立ち上がろうとしたが、綾姉の手が頭に伸びてきて阻止された。そして乱暴に頭を撫でられた。

「あんた、私と対等になるうっての？」

心臓が凍りつくかと思うほどその声は低かった。
ぐいっと髪を掴まれて無理やり目と目を合わされてしまう。
私はその手がいつ離してもらえるのかとそればかり気にしていたが、
やがてその原因が自分にあるのだとわかって口を開いた。

「ごめんなさい」

「うん。いい子ね」

そして手が離された。いや、離してもらった。なんでこんなことになったんだろう。
私が綾姉に隠し事をしただけで、どうしてこんな目にあうんだろうか。
私はレムのガイドラインに「綾姉に隠し事をしてはいけない」というのを書き加えた。

「そんなに怖がらなくてもいいじゃない」

むちゃくちゃなことを言う人だ。でも綾姉はその先の言葉を続けた。

「人が心を開いてくれなきゃ、自分も開けない？ つまんないよそんなの」

そして一度ため息をつく。私はその先が知りたくて綾姉の方を見た。

「私はねえ」

彼女はまたため息をついた。よっぽど言い辛い事なのかも知れない。
落ち着きなく体を揺すっていた彼女は、ようやく覚悟を決めるとぐるりと後ろを向いてしまった。
。何なの一体？

「私はあんたの師匠なの。女装バーの。わかる？」

わからなかった。綾姉が言いたいことが、何ひとつわからない。
けれど何かがかみ上げてきて、息が詰まってしまう。

「だから絶対に、たとえ私が反省しなきゃいけないことがあったって、あんたの前でそれを出す
ことは出来ないの」

その瞬間、私は全てに謝りたい衝動に駆られた。

ごめんなさい。私は色々な人に愛されていたくせに、何ひとつ気付けていなかった。
自分が好かれるようにと、そればかりに心を砕いていたせいで、全てのものが自分によって与えられたものだ

勘違いしてしまっていた。

謝ったってもう遅い。そしてどうにもならない

。だから謝ることをやめて、せめてお礼を言おうと思った。

「綾姉、ありがと」

「うん。……でもね、今だけはミキの師匠をやめるわ。だからさ、ほら、なんでも話していいわよ」

「えへへ」

私は綾姉に擦り寄って背中合わせになった。彼女の背中を通して心臓の音が聞こえる。不思議だ。

背中でも感じるんだ。

「綾姉の背中、ごつごつする」

「お互い様よ」

相手の顔が見えないせいか、独り言を言っているような気がした。
けれど綾姉は答えてくれて、その声は背中を通して私に伝わった。

「私、写真屋のアルバイトやってるんだけど」

「知ってる。ここに来たときに言ってたじゃない」

「うん。そこの仕事も結構おもしろくてさ」

「そっか」

「私、これからどうしたらいいのかわかんなくなったんだ」

それから綾姉は背中で喋っていた。言葉なんてひとつも聞こえなかった。
私はその音を聞きながら、ぼんやりと考え事をする。もうひとつの選択肢についてだ。

「すぱっと女になればいいじゃない」

香里さんならそう言うかもしれない。しかし私にはひとつの前提があった。それは性同一性障害の診断書をもらえないことだ。両親に告白することの出来ない私は、法律的に女になることが出来ない。いっそ親が死んでしまえば、などとは考えられない。私はあの人たちを愛していた。本当にあの人たちに愛してもらったと感じている。しかしその感謝を彼らに返すことは出来ない。なぜならそれは子供に返すべきだからだ。それなのに、私にはそれができない。

自分が親なら、と考えるとぞっとする。自分の子孫が残せないなんて、そしてそれが意図的に行われるなんて、悲しすぎる。憎しみすら感じるかもしれない。しかし私はそれをやってしまった。やったからこそ、余計にその重み分かる。事の重大さをやっと理解した私に、それを両親へ説明するような勇気はない。私の頭はやはり同じところをぐるぐるまわっているようだった。

綾姉が急に変な提案をした。

「ミキ、お風呂掃除しよっか」

そう言ってさっと立ち上がって私を立たせてくれた。

「お風呂なら、昨日洗ったばかり」

「いいの。洗うことに意味があるの」

綾姉はリビングのテーブルに置いていた書類を片付けてから、さらに不可解な言葉を残して衣裳部屋に行ってしまった。

「それじゃ、お化粧して、水着に着替えてきてね」

言われた通りにしてお風呂場へ行くと、ホルターネックのビキニを着た綾姉がいた。淡いターコイズに、淡い黄色の大きな百合。とってもトロピカルだ。そろりと彼女の股間に目をやると、大丈夫。

あるはずのものはない。私たちは下着を着る時の必殺技を持っているのだ。

「あら、相変わらずガーリーなのが好きなのねえ」

私は淡いピンクに小花を散りばめたビキニを着て、カーキ色のパレオを巻いていた。私たちにとって、水着を買うというのはセーラー服を買うのと大差ない。なりきりしたいだけのためにそれを買うのだ。実生活で使えるはずのないそれは、クローゼットの中でいつも待ちくたびれていた。

「でもそのパレオはいらないわ」

そう言って無理やり剥ぎ取られる。私はこの後の展開が気になって、されるがままだった。もし今宅急便が来たらどうしよう、なんてどうでもいいことまで考えてしまう。

「掃除を、するんだよね？」

「当たり前じゃない。さ、やるわよ」

綾姉はシャワーで浴室全体を流していった。確かにお風呂掃除をするみたいだ。私はそれを呆然と見ている。

二人でお風呂掃除をしたことなんてないのだ。何から手をつければいいのかわからない。浴室の壁を流し終わると、彼女は足元のスポンジを手にとった。二つあったので片方を私へひょいとはげると投げた。

「あれ、なんで洗剤使わないの？」

綾姉はスポンジにボディソープをたらししていた。もったいないというか、もったいなくないというか。よくわからないけど、間違ってると思う。

「これで十分落ちるのよ。弱酸性で肌にもいいしね」

なるほど、と思いながら私もそれに習った。そしてごしごしと浴槽を洗っていく。綾姉は洗い場担当だ。ボディソープなので面白いほど泡が出て楽しい。いつもは適当な服を着てやっていたけれど、なるほど、水着だと、なんというか……。

「わくわくしない？」

「する。なんで？」

「なんでだろ、わかんないわ」

私は浴槽の壁へとスポンジを進ませる。
手を伸ばして上の方を洗っていると、泡が落ちてきて体に張り付く。
でもやっぱり、洗剤じゃないから気にならない。むしろ、楽しい。
綾姉の方を見ると、彼女はシャンプー置きを洗っていた。綾姉の足、きれいだな。
いつもと違ってアップにしている髪。そのうなじも色っぽい。
彼女の背中相変わらず広いのに、その体はなぜか艶めかく見えて、私はドキドキしてしまう。

私たちの体は男のそれと同じだ。
首が太ければ肩も大きい、背中だって腕だって、本物の女の子に比べればなんだって大きい。
それを感じるたびに私たちの心は暗くなるけれど、今こうしてお風呂掃除をしている分には、
少しも自分を不幸だとは思わない。
決して広いとは言えないお風呂場。
そこでぶつかり合いながら掃除をする。これは掃除というよりはお遊びだった。

「ふふ、あんたも洗ってあげる」

「え、やだ」

問答無用で飛びかかってくる綾姉から逃げようとする、
床も壁もつるつる滑って思うように動けないことに気付いた。
私はすぐに考えを改め、反撃に出る。綾姉の腕を掴んだ。
しかし滑ってしまってすぐに解かれてしまう。
バランスを崩した私はうつ伏せに倒れてしまい、そのまま綾姉に体を押しさえつけられた。
もう動けない。

「ミキはいじめ甲斐があるのよね」

葉子と似てるな、と私は思った。私の周りには、どうしてこんないじめっ子ばかりなんだろう。
望む望まないに関わらず、彼女たちは私を征服しようとする。そして私はそれが嫌じゃない。
世の中って言うのはうまく出来てるなあ。
男でも女でもない私が、ちゃんとでこぼこの溝にはまっているのだ。

浴室全体をシャワーで流してしまうと、どこを触ってもつるつる言うので嬉しくなった。
自分の体についた泡も全部流してしまうと、プールから上がった後のようなだるさを感じた。
ああ、疲れた。でも楽しかった。そんな事を言い合う私たちに、文句を言う人はどこにもいない

